直言

超高齢社会では病気を早期発見・診断しQOLを守るため日々の診療で積極介入

このパラダイムシフトへの柔軟な対応が要



鎌ケ谷総合病院（千葉県）院長　増井 文昭（ますい ふみあき）

1990年に慈恵医大を卒業後、「軍隊」と言われていた整形外科に入局、同大柏病院の診療部長を8年間務めた後、千葉西総合病院に赴任しました。人工関節・腫瘍・外傷の三足のわらじを履きながらテーラーメードの四肢再建を行ってきましたが、2025年8月末の夕方、鎌ケ谷総合病院に院長として赴任してほしいとのご連絡をいただきました。分不相応に加えて、あまりに急な話であったため、非常に戸惑いながらの11月の赴任となりました。

「人生100年ドック」＆「がんロコモ・骨緩和外来」オープン

当時、当院は心臓血管外科閉鎖による減収、手術件数および外来患者数の減少に加え、11月の医業収入も前年度比で大きくマイナスとなっていました。私自身、これまで手術畑で生きてきたため、経営は全くのド素人であり、考える暇がないまま日々が過ぎていきました。

その後、26年6月に急性期40床、8月に回復期49床の増床を行いました。これまで331床、病床利用率93％前後の病院の病床を「果たして埋められるのだろうか」という懸念の中、まずは医局会で組織体系、理念、そして経営の方向性を再認識してもらい、「職員一人ひとりが行動すること」を重視して、運営を進めてまいりました。東上震一理事長の方針の下、徳洲会は着実に前進しています。「アドバルーンを揚げなければ何も始まらない」と繰り返し伝え、一歩前へ出る組織をつくり、そして病床利用率100％を目指し、チーム一丸となって進んでまいりました。職員のポテンシャルが高かったため、効果は早期に現れ、増床直後の8月末に急性期病床利用率は、100％超となりました。

今後、成人の軽・中等症患者さんは減少し、軽・中等症の高齢者の救急搬送が増加します。日本は世界に誇る長寿国、今や「人生100年時代」と言われる中で、要介護にならずに生活していくことが重要です。健康とは、充実した人生を送るための手段であり、要介護状態になることは人生の質（QOL）を低下させる大きな要因の一つになります。ひとたび病気になると、元通りの健康を取り戻すには、長い時間がかかります。

大病院が病気を治すのは、当たり前の時代になりました。超高齢社会では、病気を早期に発見し、健康と生活の質を守るために、日々の診療で積極的に介入することが求められます。このパラダイムシフトに柔軟に対応していくことが、重要です。無症候性の病態を早期に発見・治療するうえで、公的医療で行われている健診だけでは、決して十分とは言えません。東上理事長も「プラスαの気配りが重要」と述べられています。当院では、ふらつきなどによる転倒で救急受診された患者さんに対し、細かく検査する方針を打ち出し、頸椎損傷、骨転移、軽症硬膜下血腫、未破裂の脳・頸動脈瘤といった無症候性の病態を発見、早期治療へつなげることができました。

数多くの転移性骨腫瘍の治療経験から、転移を契機に“がん”が発見される高齢者は予想以上に多く、人間ドックなどによる早期発見・早期治療の重要性を痛感しています。早期に発見すれば生存率は、高まり、病的骨折する前に見つかれば、手術を回避できる可能性もあります。高齢者が“元気”でいることは、日本社会にも好影響をもたらします。まずは私の専門領域である“がんロコモ”から着手し、「人生100年ドック」と「がんロコモ・骨緩和外来」を開設いたしました。高齢者の予防医療、ならびに“医療と介護の複合ニーズ”は、大規模病院にとってNew Frontierであり、速やかに対応していくことが肝要です。

開腹・腹腔鏡手術とロボット手術両輪体制構築し2040年問題へ対応

今のトレンドに乗りつつ、15年、20年先を見据えた体制も整えてまいります。2040年問題は、徳洲会にとってさらなる飛躍のチャンスです。ロボット手術、脳血管治療、トモセラピーなど先進医療に加え、今後は高齢者救急医療の重要性がさらに高まります。これには総合的に判断して低侵襲な術式を選択することが好ましく、開腹・腹腔鏡手術の重要性を再認識し、ロボット手術との両輪体制を構築していく予定です。残された課題は多く、富士山にたとえれば未だ3合目にいる状態ですが、徳洲会グループの一員として、地域医療に貢献してまいりたいと考えております。皆で頑張りましょう。

神奈川県のグループ7病院

搬送時安全管理を徹底

医療搬送安全対策講習会開く

神奈川県内の徳洲会グループ7病院は9月6日、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）で「医療搬送安全対策講習会」を開催した。同講習会は葉山ハートセンター、湘南鎌倉病院、日本救急救命士会「医療搬送安全対策ワーキンググループ」の3者合同企画で、7病院から救急救命士や事務職員ら計34人が参加。座学やグループワーク、実車を使った訓練で研鑽した。



実車を使いストレッチャーの操作方法を学ぶ



神奈川県グループ7病院から34人が参加し研鑽

冒頭、喜熨斗智也・日本救急救命士会会長は、救急搬送件数の増加にともない医療機関の救急車活用が期待される一方、事故防止や安全管理教育が重要になっていると指摘。「本講習を通じ、安全な搬送体制の構築を目指しましょう」と呼びかけた。

講習では、緊急走行時の道路交通法や科学的根拠を学ぶ講義をはじめ、呼称運転やマイク周知などの要点、事故発生時の対応手順などを整理。グループワークでは、ヒヤリハットに関する8事例をもとに、事故原因や予防策をグループごとに議論した後、その内容を共有した。午後の実技では、実車を用いた誘導訓練や急制動、遠心力を体感する同乗体験などを行い、搬送業務にともなう危険性と安全管理の重要性を再認識した。

参加者からは「救急車の後部に実際に乗ることで、走行中の大きな揺れやストレッチャー操作の感覚を体感できた」、「救急車が動かなければ救命活動そのものが成立しないため、オイル量やバッテリーなどの日常点検を怠らないようにしたい」など感想が聞かれた。

企画に携わった湘南鎌倉病院の作田翔平DX推進室兼救急調整室係長は「今回は救急救命士だけでなく事務職員も参加し、職種を超えて安全対策を学べました。地域医療の支えになるべく、多職種連携を重ね、盤石な搬送体制の構築に取り組んでいきたいです」と強調。

葉山ハートセンターの竹内太郎・連携室課長補佐は「今回の学びを生かし、自信をもって安全に搬送業務を遂行したいです」。

藏並・湘南藤沢病院乳腺外科顧問

中学校で“がん教育授業”

湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の藏並勝・乳腺外科顧問（医師）は9月10日、茅ヶ崎市立浜須賀中学校で「がん教育授業」の講師を務めた。がん診療に力を入れ4月に地域がん診療連携拠点病院の指定を受けた同院に、がん教育を推進する県から協力依頼があった。

体育館を会場に2年生約200人に向け藏並顧問は「少しずつわかってきた“がん”のこと」と題し講義。がんの発生や進行の仕組み、リスクを下げるためにできること、治療法、相談体制など解説し、早期発見・がん検診の大切さを強調した。



がん医療の広範な話題をかみ砕いて講義する藏並顧問

最後に「帰宅後、今日の話をご家族と話し合ってみてください。そして気になることや心配なことがあれば、先生や保健室に相談してみてください」と呼びかけた。質疑応答も活発で盛り上がった。「とても真面目に聞いてくれて生徒たちの真剣さが伝わってきました」と藏並顧問。「教育への貢献も、がん拠点病院の役割のひとつです。機会があれば今後も協力していきたい」と意欲的だ。

「電カル停止時」訓練を実施

南部徳洲会病院



模擬患者に対し、紙カルテを運用する訓練を実施

南部徳洲会病院（沖縄県）は9月15日、院内で「電子カルテシステムダウン時訓練」を実施した。サイバー攻撃などによるシステム完全停止を想定し、カルテの紙運用への迅速な切り替えや診療継続性の確保を検証するのが目的。病棟や外来フロア、コメディカル各部署が連携し、模擬患者への対応手順を確認した。

訓練では、患者取り違え防止の本人確認や伝票作成の手順、各職種の役割分担など、実運用のための多様なボトルネックが浮き彫りとなった。宮城智之・情報システム管理室課長補佐は「単なるマニュアルの確認にとどまらず、実際の紙運用での課題を洗い出すための訓練となりました。万が一の際も地域に対する医療を止めず、患者さんの安全と診療の継続性を確保することが何より重要だと考えます」と強調。

また、同院の訓練がグループ内で少しでも参考になればと考えており、「電子カルテに頼れない状況でも診療を継続できるよう、こうした訓練をすることが大切だと思います。必要であれば、当院のノウハウを共有させていただきます」と呼びかけた。今後は抽出した課題を反映し、マニュアル改訂や運用改善を進める方針だ。